

新連載

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

リレー連載・第1回

ライティング指導にコーパスを活かす

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

◆ライティングはなぜ難しいのか？

今までの学校現場での英語教育は、文法を理解し、文章を読解し、リスニングができることに重きが置かれていた。しかし、言語は本来自由に話し、書くことができなければあまり意味がない。日本人は一般的にこれがとても苦手である。外国語でアウトプットをするために必要なのはなんといっても語彙だろう。必死で英単語を暗記しても、いざ英文で何かを書こうとするときはほとんど役に立たない。これは英語学習者と英語教育者にとって、今でも共通する悩みだと思う。外国語を学習するときになぜライティングが困難なのだろうか？

ATMの音声指示のように決まりきった文を一方的に言うだけなら一対一対応の「点」の意味の単語からなる定型文を丸覚えしていればなんとかなる。しかし、文を書くときには、自分の表現したい内容をもっとも適切に表出できる単語を数多くの単語群から選ぶ必要がある。同じ類の内容を表現するのに、様々な表現が可能である。様々な選択可能性の中からどのことばを選んで表現するかは、例えば将棋でいくつもの可能な手筋の中から最善の一手を探すのと同じようなものである。語彙にもつ単語の数が少なければ、選択の余地はない。とにかく意味の近い単語1つだけを使い続けるしかないことになる。残念ながら、外国語学習の初心者はこの状況にいる。

ではたくさんの単語を知っていれば、的確な表現がすぐにできるのだろうか。必ずしもそうとは言えない。点でしかない意味で文を作り、文の意

味を表現することは難しい。どの範囲で(他のどの文脈で)その単語が使えるのかわからないからである。

例えば、日本語で「話す」表現にあたる動詞が、英語では say, tell, speak, talk, などの基本動詞として存在する。「考える」にあたる動詞も英語では think, consider, believe, assume, suppose, conjecture など多数ある。これらの動詞の意味は、一見互いに似ているが、それぞれ異なる意味が異なり、決してどの文脈でも交換して同じように使えるわけではない。それぞれの意味の違いがわからなければ、これらはライティングに使えることばのレパートリーにはならない。実際、学生に英語で何かを論評する文章を書かせると、ほぼ“I think”しか使わない。この問題は日本人の英語学習に特有のものではない。なぜ外国語学習者は、外国語で類義の語の使い分けを覚えられず、1つの単語に固執してしまうのだろうか？

外国語を学ぶということは、世界の区切り方を根本から学び直すことに等しい。しかし、人は外国語と母語の語彙のシステムが同じであると無意識に思いがちだ。その結果、一見対応する単語があると——つまり本来「面」である意味のどこかの「点」で2つの言語の単語の間に重なりがあるとき、その外国語の語が「面」としても母語の語の意味と重なると考えてしまうのである。

実はこのような思い込みを正すことはかなり困難で、外国語学習歴がかなり長くなっても学習者は類義の語の使い分けを覚えられず、1つの単語に固執してしまう傾向がある。次頁図下段のよう

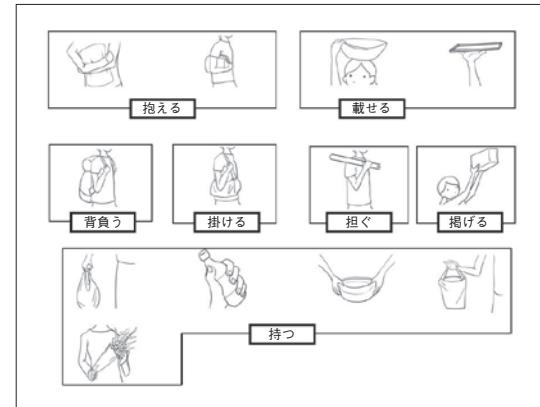


図 「持つ」の意味範囲

なモノを手を持つ行為は日本語では「持つ」という。日本語では、支える部位や持つ動作によって「持つ」「抱える」「背負う」「担ぐ」など複数の動詞で区別する。対して中国語は図の13の動作をすべて別の動詞で表す。筆者は日本語を母語とする中国語学習者がこれらの動詞の使い分けをどれくらいできるか実験で調べた。すると、学習者は日本語で区別する動作(例えば「抱える」「背負う」「担ぐ」など)にあたる動詞は覚えることができたが、日本語では「持つ」でひとまとめして区別しない動作の動詞はほとんど覚えられないということがわかったのである。

人は一度に処理できる情報に制限があるため、外界の情報のすべてに注意を向けることができない。そこで、見知らぬ情報を自分の知っていることに引き寄せ、それらを選択する。そのような知識の枠組みを「スキーマ」という。「スキーマ」はほとんどの場合、自分の経験に基づき、世界を直観的かつ素朴に捉えたもので、ある種の「思い込み」であるといえる。外国語を学習するとき、学習者のスキーマは母語についての知識である。個々の外国語単語の意味の範囲が訳語として当てられた日本語の単語と同じであるというスキーマのもと、学習者は覚えた単語を誤って一般化してしまうのである。この誤ったスキーマがあると外国語の単語の様々な使い方や意味での文を読んだり聞いたりしても、日本語訳語に合わない文例は全部スキーマのフィルターで取り除かれてしまう。例えば「考えるは think」と思い込んでいると、リスニングやリーディングで、think 以外の動詞

が何度出てきても、「あ、thinkと同じ意味ね」と思い、それぞれの意味を文脈から考えようとしなくて、記憶にも残らないのである。

この誤った思い込みを克服するために大事なことは、まず、単語同士のネットワークを大まかに掴むこと、つまり、それぞれの意味の分野にどのような単語があり、それぞれの単語がどのような関係で結びついているのかわかり、類似の単語同士の意味の違い、使い方の違いを意識を向けることだ。

◆コーパスを授業に活かす

このために有効なのはコーパスである。最近ではコーパス分析をするためのツールもどんどん進化している。単語が使われる多くの文例を一覧で見ることができただけでなく、他の単語との共起のしかたを探ることもできる。2つの類義の単語の共起のしかたを比べ、そこから意味の違いを考えることもできる。本連載では次回以降ネットで作るツールを紹介する。高校や大学では、これらのツールを教室で使うと、英語語彙のネットワークを学習者がつくっていくために非常に有効であると思う。生徒が英語の語彙と日本語の語彙の構造の違いに気づき、日本語と英語の単語の意味が一一対一対応していないこと、英語の単語を日本語にただ置き換えていっても英語の語彙ネットワークはつukれないことに自分から気づけばしめたものだ。生徒が辞書とともにこれらのツールを活用してひとつひとつの単語の意味を深く探り、単語のネットワークを探索していく方法を覚え、それを自分で習慣的に行うようになれば、自律的にことばの世界を探究することが可能になるのである。

* * *

次回以降は福島県立原町高校の川村葉子教諭によるライティングの授業でコーパスの導入を試みた実践をご紹介します。どのようにコーパスを高校生に導入したか、コーパスを使うとどのような単語理解に有効か、どのような活動をして、生徒にどのような気づきがあったか、どのような時にうまく行かなかったか。読者のみなさん自身の英語学習と英語の授業の双方に役に立つ様々な情報を紹介していきたい。

高校生のライティング上達のための

コーパス利用の試み

第6回・最終回

コーパス学習で
アクティブ・ラーニングをするためのQ&A

川村葉子

Kawamura Yoko
(福島県立原町高等学校教諭)

今井むつみ

Imai Mutsumi
(慶應義塾大学教授)

前回までに汎用コーパスの SkELL や英辞郎 on the WEB を使って生徒の質問に答える方法や、ライティングの指導にコーパスをどう活かせるかに触れてきました。最終回は認知科学者の今井先生との Q&A を交じえてコーパスが語彙・文法指導に資する可能性を考えてみたいと思います。

■単語の学習＝暗記でよいのか

過日、私の勤務する高校に、フレッシュな教育実習生たちがやってきました。熱意に溢れ一生懸命な姿に心が洗われるようでしたが、1つだけ気になったことがあります。教育実習生の指導案の「単語を暗記させる」という表現です。高校生の中にも単語は「暗記するもの」と捉えている生徒がいます。語彙・文法の学習において、最終目標は「使えるようになること」だと思います。与えられた文脈や共起する語などから、どの単語をあるいはどんな表現を使うのかは必然と決まってくるもので、そういった語彙・文法を選択ができることが「使える」ことだと考えます。高校時代に語彙・文法を学習するとはどのようなことなのかを授業を通して体験させ、教室の外であるいは卒業後も、自立して語彙・文法を学習していける生徒を育てたいと思っています。

Q. そもそも「暗記」とは何なのでしょう。なぜ私は「暗記」に違和感を覚えたのでしょうか(単語は「暗記しよう!」でいいのでしょうか)。

今井の回答: 母語の単語の意味は、文法的な構文や、その単語が使われる状況の知識、その単語と意味は近いけれど区別して使わなければならない類似の単語、など様々な知識を包含した

豊かな知識になっています。そのような豊かな知識は、子どもが個々の単語の意味を覚えるときにいっしょにつくられます。例えば、子どもが母語の動詞を覚えるときは、まず構文と名詞(主語と目的語)に注目し、そこから動詞の意味を考えます。だから動詞を使う上で最も大事な構文、共起する名詞についての知識は、その動詞の意味といっしょに記憶されるのです。形容詞は、それが修飾する名詞との関係で意味が決まります。意味を文脈から自分で考える子どもは、ごく自然に形容詞の意味を、共起する名詞とセットで覚えます。

翻って、英語学習者が「英語の単語を暗記する」と言うとき、一般的には、単語のスペル、発音に対して日本語訳を貼り付けたものを暗記する、ということが行われます。そのとき、文法的な構文や、共起する単語、文脈などにはほとんど注意を向けません。このような暗記をしても、英語は使えません。8月号の本欄で、How much is this painting ()? の中に、正解の worth のほか、precious, value, worthy など、構文的に不可能な単語が次々に挙げられたことをご紹介しました。生徒たちは単語の構文に注意を向けず、日本語訳だけを暗記したので、このように考えてしまうわけです。

一方、すべての暗記が悪いわけではありません。プロ棋士の島朗九段は、『島研ノート 心の鍛え方』(講談社, 2013) の中で、棋譜の暗記についてこのように述べています。「指定図書の中からまず一冊、一局ずつ勝った側から並べ、次に負けた側から並べる。そして暗記して棋譜

に書き出し、何も見ずに並べて一局が終了する。都合四回ほど同じ将棋を言葉のほんとうの意味の通り、精密に調べる方法だ……」島九段は暗記ということばを使っていますが、その意味合いは、通常の暗記とはまったく異なります。1つ1つの駒の配置の意味を考え抜いたうえで覚える。このようにして覚えた配置は、「生きた知識」となり、必要な時にすぐに思い出せます。

英語の単語の暗記も同じです。コーパスの文例からその単語が現れる構文、共起語、文脈などに注意を向けながらその単語の意味を精査すれば「生きた」知識になります。暗記自体が悪いのではなく、暗記のしかたが大事なのです。

■アクティブ・ラーニングとは?

高校の授業でコーパスを使用して見て、効果的だと思われる点が語彙・文法の学習という観点に加えていくつか挙げられます。生徒たちがたくさん例文を見たり、主語や目的語の結びつきを協働で考える際、お互いの仮説を話したり、意見交換をしたり、やり取りを通して帰納的に「こういうことなのではないか」と結論づけたりするという行動が見られたことです。その話し合いの内容が必ずしも正しかったとは限りませんが、そのレベルも高かったわけではないのですが、高校生が自分たちの知識の中で比較、検討している姿を見て、アクティブ・ラーニングとはこういうことかもしれないと考えさせられました。授業の中にコーパスを取り入れたことで、教科固有の知識だけでなく、批判的思考や、根拠に基づいて考えるという科学リテラシーのような汎用的なスキルも育てることにつながったのではないかと思います。また、話し合いをしているときの生徒たちは楽しそうでもあり、「学び」＝「楽しい」という本来の姿を見たような気がします。

Q. コーパスを使用した学びについて今井先生は認知科学の視点から、どのように考えますか。

今井の回答: そもそも外国語は批判的思考を働かせないと学習できません。英単語の意味を理解するとき、つい日本語の対応する語の意味をベースにしてしまうからです。例えば, forgive, excuse, permit, admit, approve, accept

はみな「許す」という日本語を当てることができず、意味はまったく異なります。しかし、多くの生徒は同じ訳語が当てられる英単語はみな同じ意味を持つと思ってしまう。「単語は暗記するもの」と思い込み、批判的思考を働かせて意味を考えていないからです。コーパスを使って多くの文例や共起語のパターンから、同じ日本語が当てられる英単語の意味の違いを自分たちで考えることで、同じと思っていた単語の意味が違うことに気づき、単語同士の使い方を対比して、意味の違いを探っていくようになると思います。それこそが、批判的思考を働かせたアクティブ・ラーニングです。

生徒たちはそこからさらに、英語話者としての単語の意味の「似ている」は必ずしも自分たちと同じでないことに気づくようになります。その気づきは、異文化を理解しようとする態度につながります。また、英語、日本語と言った個別の言語を超えて、言語そのものの面白さにも気づくようになるのではないのでしょうか。言語の面白さ、奥深さに気づけば、日本語のことばの意味にも今よりも注意を向けるようになるでしょう。それはもちろん、批判的思考を働かせながら自分の考えを的確に文章にまとめる力にもつながります。

筆者(川村)はこれまでコーパス使用の良い効果について触れてきましたが、効果のなかった例もいくつかあります。happy と glad を検索させたものの、コーパスの例文からは使い方の違いがはっきりわからず、結局教師が説明したということがありました。生徒にどのような議論をさせて、着地点をどこに設定するのか、いかに介入し全体をまとめて行くかを考える計画性が重要です。

このような失敗例を考慮に入れても余りある効果がコーパスには期待できると私は考えています。語彙・文法の指導はコーパスのみでよいということでは決してありません。大切なのは、コーパスはあくまでツール(しかもことばの面白さに迫ることのできる)の1つであるということだと思います。日々、生徒や学生の語彙・文法指導を研究されている先生方にこのコーパス使用の実践例が少しでも参考になれば幸いです。